

## 専門家インタビュー

# 美しい村を生む ローカルの視点

トーマス・ライソン 著

『シビック・アグリカルチャー』 翻訳者

獨協大学外国語学部教授

## 北野 収



きたの・しゅう

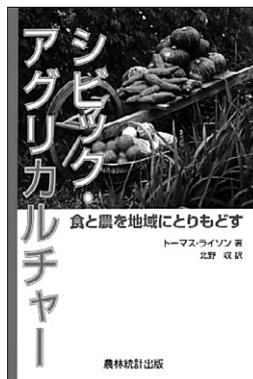
●農水省や日本大学を経て、現在、獨協大学外国語学部交流文化学科教授。米国のコーネル大学で修士号（国際農業開発論）と博士号（都市計画学）を取得。

シビック・アグリカルチャー

農林統計出版  
2,100円/228ページ

トーマス・ライソン

●1948年、米国伊利ノイ州生まれ。コーネル大学農学生命科学部教授。同大学地域・食料・農業プログラム所長。農村社会学者として農村の青年教育や有機農業、ローカル・フードシステムを研究した。2006年に58歳で逝去。



食と農のグローバル化という世界の潮流に対抗するように、各地で生まれつつある食料生産のローカル化の動きとその重要性を描いた『シビック・アグリカルチャー』\*1。それに共感するカルビー(株)の松尾雅彦相談役が、翻訳者の北野収氏に話を聞いた。

(まとめ/窪田新之助)

### 国家的価値基準への疑問

松尾 『シビック・アグリカルチャー』を読んで眼から鱗の思いでした。私は多くの機会を捉えては、この本を売り込んでるんですよ(笑)。

北野 それはありますがどうぞごまします。

松尾 ただ、この本は読み方が分からないと、また問題意識を持っていないと、何が良いのか理解しにくいと思う。そこで今回、インタビューをお願いしたわけです。まず伺いたいのシビック・アグリカルチャーの意味です。

北野 ライソン自身は海外に出かけて行って、多くの事例をみてきたというわけではないですが、この言葉

には米国だけでない普遍性を持たせているはず。一つはグローバルゼーションではなく、良い意味でのローカリゼーションの重要性ということになると思います。お金が地域社会にとどまることで、経済的免疫が高まるということですね。日本には地産地消という言葉がありますが、もっと幅が広いというか、深い意味の言葉になると思います。

松尾 幅広いとは？

北野 シビック・アグリカルチャーは民主主義が何かということを言っています。地産地消と違い、政治的概念が入っている。民主主義という

のは、地域社会に多様な人々がいて、ある程度に権力が分散していて、社会的多様性があるわけです。それはまさしく米国の建国の理念に関わってくることです。そういったものをライソンさんは「善」と考えたんです。ただ、そういう多様性は放っておくと、すぐに消えて均一化して行く。では、民主主義を残すために何が必要かというと、農業でいえば家族経営が必要で、彼らと一緒に仕事をする加工業者や流通業者も必要だと。それによって国全体の民主主義の根底部分がメンテナンスされるということですね。

\*1 トーマス・ライソンはその著書の中でシビック・アグリカルチャーの用語について、「アメリカの農業とフードシステムが産業化とグローバル化の道を歩んできた」一方で、一部の地域で新たに出現した「農業と食料生産のローカル化というそれは正反対のトレンド」「地域に根ざしたこの農業と食料生産の再生」と定義している。



シビック・アグリカルチャーに共感する、カルビー相談役の松尾氏

論文指導の先生はハンガリー人で、カール・ポランニーの友人。彼は私の研究テーマの内容を聞き、すぐに「ありえない」と全否定してきた。最初、なぜ?と思いましたが、地域興しをやって一定の観光客が来

**松尾** どういう経緯でこの本を翻訳されようと思ったんですか?ご来歴も絡めながら、聞かせてください。  
**北野** 少し長くなります。私は元々、農水省で約10年間にわたり行政官をしていたんですね。ちょうど食管法や農業基本法の作り直しの時期。一部の先進的な人々以外は、私も含めて旧基本法モードで仕事をしていました。国際化がやってくるのは仕方がないと。だから産地形成や高付加価値化を一層進め、国際競争の中で生き残れる人や産地を育てることの意義を信じて疑いませんでした。  
**松尾** 当時のお仕事は?  
**北野** 国際部を経て、かつての構造改善局の地域計画課にいました。そこで村づくり対策に関わったんで

す。生産に直結した話というより、村々の風景とか伝統文化を活かした取り組みを表彰しようという。そんな仕事をこなす中で、二つのことを考えるようになりました。一つは、こうやって美しい村を保全する人に光を当てることが良いことではないかと。ただ、一方では逆のことも考えていた。表彰することは地域興しのためだが、果たして、そうした地域がグローバル化の中で本当に持続可能性があるのかと少し疑ってしまいました。  
そんなことを思いながら、米国の大学に留学させてもらう機会が二度ありました。二度目は農水省を退職してからです。その時の研究テーマが「グローバル化時代の農村活性化対策」だった。

論文指導の先生はハンガリー人で、カール・ポランニーの友人。彼は私の研究テーマの内容を聞き、すぐに「ありえない」と全否定してきた。最初、なぜ?と思いましたが、地域興しをやって一定の観光客が来

たり、農村の特産品の開発や販売ルートを作ったりすることが、どうして全否定されるんだろうと。  
**松尾** 一体どういった理由だったんです?  
**北野** それは段々と先生と相談するうちに分かってきたことです。農村の観光とか農村の特産品のマーケティングとか、ニッチマーケットの中で目覚ましいことをやった村ばかりがビックアップされる。ただ、そうした村もいずれは、もっとすごいことをやる村にとって代わられるし、同じ条件なら東京に近い村が有利になる。つまり市場競争ではないかということなんです。グローバルバリエーションに対抗していると言うけれど、ナショナルレベルで競争していて、そうやって一時的にうまく成功している村々を表彰するだけではないかと。  
確かに、村おこしが盛んだった80年代の後半とか90年代の前半に評判の良かった村々って、いま発展しているところがどれだけあるのかわからないか知られても、ほとんど聞かなくなっていますね。知人の農業経済学者も、あの村づくりブームは一体何だったのだろうと言っています。そんなことを思うようになった時に、ライオンさんの授業を受けるようになったんですよ。

松尾 それがなぜ、翻訳をするまでに至ったのですか?  
**北野** あれは獨協大学の前にお世話になった大学に仕事が決まった時でした。これから何を研究するかを思案していた時、米国時代の大学の先生に相談して、ラテンアメリカに行こうかと決めたんです。  
**松尾** またどうして?  
**北野** 当時はちょうど、NAFTA（北米自由貿易協定）<sup>※2</sup>の締結が議論されていた時期だった。だからメキシコなんかでは、NAFTAが締結

**ローカリゼーションへの目覚め**  
**松尾** それが出会ったわけですね。  
**北野** 彼はローカリゼーションの授業をしていました。  
**松尾** ローカリゼーションですか。  
**北野** 当時はまだ『シビック・アグリカルチャー』が出版されていなかったですが、そこに参考文献として出ている本は読まされていました。ただ、その時はまだ、こういう考え方もあるかなというぐらいで。グローバルバリエーションのこの時代に、ややきれいなことではないかと、半信半疑に思っていたのが本音です。

※2 米国とカナダ、メキシコの3カ国が締結した自由貿易協定。1992年12月に署名し、94年1月1日に発効した。

## 新自由主義の影響

されれば自由化による急激な変化が起きるのではないかと。そこで現地の人々がどんな反応をするかというのを見るのは大変勉強になるはずだ。それはラテンアメリカ研究というだけでなく、日本のことを考えるにも良い機会だと思った。

科学研究費をもらえたので、メキシコ南部の貧困地帯の農村に行きました。そこで日本でいえば協同組合、向こうではNGOということになるんですが、その活動を調査して『南部メキシコの内発的発展とNGO』という本にまとめました。大学の講義とは別な形でローカリーションの必要性を教わったんです。大学院生をやっている時には理論は分かっていたものの、半信半疑であって官僚モードがどうも抜けていなかった。それがやっと分かったような気がしました。

**松尾** ラyson先生の考えを実地で学んだわけですね。

**北野** そうです。そんなことがあって、ライソンさんはいま何をしているかなど。いつか日本で彼のことを紹介したいと思うようになりまして。それでずるずるやっていたら、『シビック・アグリカルチャー』を紹介しなくては、と思い立ったわけですね。

**松尾** さきほどNAFTAの話が出てきましたが、TPPのプレ版のようなこの自由貿易協定はメキシコにどんな影響をもたらしていましたか？

**北野** メキシコ人の食生活においてトウモロコシの比重はきわめて大きい。そこには宗教的な意味もあります。特に南部は先住民族の人口が多いので、文化的要素が強いんですね。小規模の家族経営が半自給自足で、トウモロコシの一部や換金作物のコーヒーを市場に出すという形で生活をしている。NAFTAができてから2005年までの間に約270万人が離農したそうです。

**松尾** それは大変な数ですね。

**北野** これは確か、全農家戸数の約3割に当たります。多くの家族経営農家が壊滅的打撃を受けているわけですね。こうした事態が起きている時、まさに私はメキシコの南部を回っていました。それで先住民族の村に行くと、お父さんがあまりいない。つまり母子家庭になっている。もはやトウモロコシやコーヒーだけでは食っていけないから、男は出稼ぎに出ているんです。メキシコシティにも行くが、数としては国境

を越えて米国の労働者になっていく人が圧倒的に多い。残った家族は米国からの送金に依存しているんです。衛生テレビのアンテナが立っている家があれば、「お父さんが米国でそこそこ成功したんだよ」と教えてくれる。

そうやって村の中に新しい格差が生まれていた。メキシコ社会は男尊女卑的なんですが、男がいないというところは文化的なものや共同体的なものが解体することを意味するんですね。こういった数字ではカウントできないような、社会の劣化が起きていることをメキシコの仲間たちから見せてもらった。

## 国際版の産直提携で対抗

**松尾** 自由貿易の影響にメキシコの人々は黙っているだけなんですか？

**北野** それがそうでもないんです。注目すべきは、実践を通じて異議を申し立てていること。文句をいうだけではなく、彼らは行動で示している。トウモロコシと並んで換金作物として大きいのはコーヒーです。彼らはコーヒーで現金収入を得て、必

要な消費財を買っているわけです。それで過去にコーヒー危機があり、実はこの数字もいろいろ問題はあるのですが、売り上げ100円のうち、農家の取り分は1円とか2円とかいう話になりました。その時は国際市場が暴落したこともありまして。ただもう一つ、メキシコの食糧庁みたいな団体でコーヒー公社がありました。89年に新自由主義の改革でいきなりなくなりました。これも大きかったです。価格補償制度がなくなり、市場原理になったんですね。農家はコーヒー収入がほとんどもたえなくなった。そんな中でコーヒーのフェアトレード<sup>※3</sup>が生まれたんです。これは国際版の産直提携ですね。

## 農業開発・発展モデルの二類型

	既存の農業	シビック・アグリカルチャー
依拠する社会理論	新古典派経済学（近代化論・グローバル化）	プラグマティズム（持続可能性・市民的共同体）
経営上の前提	生産力主義（経済的効率性と生産性・地球規模での大量生産、大量消費）	社会発展主義（社会的、経済的公正・地場市場向けの地元でのクラフツ的生産）
組織モデル	企業型モデル（グローバル市場で競争する垂直的または水平的に統合された多国籍機企業）	コミュニティ型モデル（小規模で地元の管理下におかれた事業体）
主役となる階層	企業に属する中間層	独立的な中間層（中小事業主、農家ら）
変化の原動力	人的資本・人間関係資本・個別の行動	市民的社会参画・社会運動

※ 『シビック・アグリカルチャー』から一部抜粋して作成

※3 発展途上国にいる経済的に弱い立場の生産者から原料や製品を適正な価格で継続的に購入することなどを通じ、彼らに仕事の機会を提供し、自立を応援する貿易のこと。

**松尾** フェアトレードは英国が始めたんではないですか？

**北野** 一般的には米国の団体が最初とされていますが、民芸品とかバナナとか、フェアトレードは世界各地で色々な形で生まれました。後にその呼称は統一された。ただ、国際フェアトレードのラベルは、オランダのNGO・ソリダリダードと、メキシコのUCIRIというコーヒー農協が連帯して始めたものです。ラベルのデザインはオランダで制作されたものでしょうが、仕組みはメキシコの農民が提案してきた。ですから、



メキシコでNAFTAの影響を調べる北野教授（右）本人提供

国際フェアトレード認証はメキシコの先住民族が発祥なんです。

彼らはグローバルゼーションに文句を言ったり、被害者意識をため込んだりするのはなく、自分たちでできることで行動を起していく。場合によっては外国の団体と提携して、ビジネスモデルを作っていく。新自由主義の中でもきちんとやっていけるなと思いました。私が書いたメキシコの本はそれらをまとめたものです。だから『シビック・アグリカルチャー』は米国の話ですけど、私の中では地域主権という点でメキシコの話とかなり重なっています。ローカリゼーションというのは世界各地で個別にあつて、そこで考えている世界観というのは普遍的でユニバーサルなものではないかと思えますね。いわば市場経済に対する社会の反乱ではないでしょうか。

### 国別ではなく地域別の視座

**松尾** そうなんです。だから『シビック・アグリカルチャー』を読むと、米国の農業も一枚岩ではないことに驚かされます。

**北野** 政治的に声を持っているのは、テキサスやカリフォルニアじゃないですか。そこに農場や食品会社

があつて産業を形成し、農務省につながっている。だから政治的な声として彼らの声は外国に聞こえてきますが、一枚岩ではありません。そういった大規模化は100年前から始まり、勝ち組と負け組が地域別に出ています。北東部であれば、負け組

というか割と家族経営が残るのは、ニューヨークやニュージャージー、ニューイングランド、ニューハンプシャーとか。いずれも日本より規模は大きいけれど、米国の中では規模がぐつと小さい。

**松尾** そんな場所の農業はどうなっているんですか？

**北野** 車で走ると耕作放棄地だらけですよ。日本の中山間地域を連想させられますね。それと南部のアパラチアの方。特に所得が低いのはサウスダコタとかアラバマとか。そういうところは過疎化も進んでいるし、地域社会が崩壊しています。こういった米国の負け組地域の情報は日本には入って来ないんですよ。企業や農務省というフィルターを通してしか、なかなか情報が来ないから。

NAFTAの影響にしても、国レベルで把握するのは駄目だと思います。そのインパクトを調べている研究をみると、米国よりメキシコの方がフルーツや野菜は強い。メキシコの中部から北部では大規模経営で

やつていて、米国の主要産地と比べても一定の競争力を確保している。

米国も地域によつては自由化で農業が駄目になっている地域もあるんです。だから個々にみれば、単純に米国が勝ち組、メキシコが負け組とはいえないかもしれない。要は米国でもメキシコでも小規模な農家は負けているが、プランテーションの大規模経営は勝っている。資本主義的経営が勝ち組で、家族的経営が負け組になっている。だからナショナルリステイックな目線では駄目で、地域でみていかないといけない。

**松尾** 重要なのは、今後もそういうパターンが将来的に変わらないのかということですか。どう思われますか？

**北野** 私は必ずしもそうは思いません。シビック・アグリカルチャーにしろ、メキシコ南部で起きているローカリゼーションにしろ、またはそのインターナショナル版であるフェアトレードにしろ、負け組の地域から出ている動きですよ。そういう動きが現場から広まり、松尾さんのようなお立場の方や問題意識を共有できる生産者、消費者の方々が注目してくれば、希望的観測が生まれるんじゃないでしょうか。

**松尾** そうですね、私は辺境から改革を起こすことが必要だと思っておりますよ。

(3月号に続く)